

# 歿後100年 カミーユ・サン＝サーンス

## 86歳まで現役作曲家として強い信念で活動を続けた

伊藤美由紀

サン＝サーンスは、ベートーヴェン没後8年後、後のフランス音楽の革命家として誕生し、ベートーヴェンの誕生日であろう同じ月日の12月16日に86歳で亡くなった。若い頃、まだフランスではベートーヴェンの音楽、ドイツ主義が非難されている時代に彼の音楽を頻繁にピアノ演奏会で紹介し、フランスに新しい潮流の発展を促し、その後、晩年にかけて若い世代による様々なスタイルが誕生する時代には、保守的な考えを固持した。リスト、ベルリオーズ、ロッシニー、グノー、ビゼーと親交があり、ストラヴィンスキー、シェーンベルクの活躍した時代も生きた急激な音楽の発展の歴史の中で、86歳まで現役作曲家として強い信念で活動を続けた。サン＝サーンスは、ベルリオーズ以降、ドビュッシーまでのフランス音楽界での重要な作曲家の1人である。

生まれてすぐに父を病気で失くし、母と大叔母に育てられる。母と大叔母の存在は、彼の生涯、音楽にも深く影響し、神経質で孤立した性格を形成した。音楽を嗜んだ大叔母により2歳でピアノを習い、3歳で作曲を始めて自分で楽譜を書き始め、パリのプレイエルホールで10歳にしてピアノリストとしてデビューしたと言われる神童でもあった。そして、パリ音楽院に入学しオルガンのクラスで1等賞をとり、サン・メリー教会、マドレーヌ教会の実力あるオルガン奏者として高い評価を受けていた。これらの経験は、彼の生涯にわたる作曲活動にも大きな影響を与えた。

パリで最高峰のオルガニストの職であるマドレーヌ教会に約20年間務め、日曜の即興演奏でも有名であった。「偉大な楽器の可能性を利用するためにはこの楽器を徹底的に知らなければならぬ。」と述べているようにオルガンを知り尽くし、その才能は、別名「オルガン交響曲」としても知られている《交響曲第3番》として結実している。「サン＝サーンスは最も世界で素晴らしいオルガニストである。」と親友のリストも彼のオルガニストとしての才能を絶賛し、この作品は、初演直後に亡くなつたリストへの想い出として捧げられており、リストの交響詩で使用されている循環形式が応用されている。パリ初演では、「フランスのベートーヴェン」と評価され、円熟期の彼の交響曲最後の作品で近代フランス交響曲の傑作の一つにもなっている。

36歳の頃、フランク、フォーレらと国民音楽協会を設立し、同時代のフランス人作曲家による交響的作品、室内楽のみの演奏会を催し、若い作曲家たちに希望を与え、ドビュッシー、ラヴェルらの出現にも影響を与えた。サン＝サーンス自身も3曲の交響曲、室内楽を発表した。彼は、当時、フランスで不人気であった交響曲と室内楽を受け入れた最初のフランス人でもある。独奏協奏曲も同様であり、約30曲の彼の協奏曲では実験的な試みを行った。伝統的な3楽章形式を3部分構成の1楽章形式へ還元を試みたり、協奏曲の独奏を流行の名人芸としての扱いではなくてオーケストラの対話として扱われるべきであると考えたりもした。スペ

インのヴァイオリン奏者、サラサーテの為に《ヴァイオリン協奏曲1番、3番》、スペイン風要素を取り入れ人気作品の一つである《序奏とロンド・カプリチオソ》を書いている。2楽章構成で循環形式の《ピアノ協奏曲4番》、3つの部分が切れ目のない単一楽章となっている《チェロ協奏曲1番》も演奏の人氣が高い。その他の彼の代表作も挙げてみる。4曲ある彼の交響詩の中で最も有名なのは、フランスの詩人、アンリ・カザリスの詩から着想を得て書かれた《死の舞踏》である。リストにも同名の《死の舞踏》がある。明らかに親友のリストの作品も意識していたであろう。サン＝サーンスの方は、楽器を効果的に用い物語を音楽で視覚的に描写している。作品の成功を反映して、リストを含む数多くの作曲家によるピアノ編曲版がある。子供向け管弦楽曲として物語や語り付きで演奏されることも度々ある組曲《動物の謝肉祭》も主要作品の一つである。14曲からなり、様々な動物の生態をユーモラスに皮肉を込めて描いている。最も有名なのは、第13曲のチェロ独奏曲の《白鳥》である。バレエ《瀕死の白鳥》は、この曲にミハイル・フォーキンが振付をして有名となった。また、第4曲ではオツフェンバックの《天国と地獄》、第5曲ではベルリオーズの《ファウストの劫罰》、メンデルスゾーンの《夏の夜の夢》、第12曲で自作の《死の舞踏》、ロッシニーの《セビリアの理髪師》、フランス民話などの断片を効果的に引用し、各曲で楽器編成にもこだわり色彩豊かに表現している。音楽形

式の概説書としても、行進曲、ワルツ、練習曲、スケルツォ、カノン、ロンド、クオドリベット（異なったメロディを同時にコーラージュ）という形で巧妙に構成されている。

そして10曲を超えるオペラ作品の中では、聖書オペラのジャンルとしても独創的である《サムソンとデリラ》が、彼のオペラの代表作である。フランスでの試演会では評判が悪く、全曲初演はリストの協力でヴァイマルでドイツ語により行われ成功を収めた。10年以上を経てフランス初演が実現し、パリのオペラ座での上演は大成功であった。ライトモテューフ的に旋律を扱っている点は、ワーグナーの影響がうかがえる。第2幕の二重唱「あなたの声に私の心も開く」と、アラビア風の旋律など東洋的な色彩による第3幕のバレエ音楽《バツカナル》は、単独でも演奏され人氣が高い。美しい旋律、劇的でエキゾチックな効果もこのオペラの魅力となっている。

サン＝サーンスは、モーツァルト、ベートーヴェンらを尊敬し、生涯、形式の完全さを追求した古典的なフランス精神の作曲家として、86歳までにあらゆるジャンルの300を超える作品を残した。晩年、ドビュッシーに伝統主義者として非難されるなどフランス音楽界から孤立していたものの、19世紀後半のフランスに交響曲を定着させ、ワーグナーやリストの交響詩の意義をいち早くフランスに伝えた彼の業績が、現在までのフランス音楽界の発展に大きく影響したといえよう。

Claude Debussy Préludes, 1<sup>er</sup> Livre  
**ドビュッシー 前奏曲集 第1巻 全曲研究**

A 5判/152ページ/定価1,980円（本体1,800円+税）

別宮貞雄 著



ドビュッシーの代表作品である「前奏曲集第1巻」の作品の成立過程、作品の特徴、そして演奏への手引きも含めて、作品を1曲毎に解説しており、ドビュッシー・ファン、又この作品を演奏する方、指導する方にも格好の書となっている。尚、本書は別宮貞雄著「遙か、一筋の途を……」の「ドビュッシー前奏曲集第1巻全曲研究」の部分を1冊にまとめたものである。

(株)芸術現代社 刊

〒111-0054  
 東京都台東区鳥越  
 2-11-11  
 TOMY BLDG. 3F  
 03-3861-2159

第1曲	デルフの舞姫
第2曲	帆
第3曲	野をわたる風
第4曲	音と音りは夕暮れの 大気に漂う
第5曲	アナカプリの丘
第6曲	雪の上の足跡
第7曲	西風のみたもの
第8曲	亜麻色の髪乙女
第9曲	とまたせレオード
第10曲	沈める寺
第11曲	バックの踊り
第12曲	ミンストレルス